

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：32524

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00701

研究課題名(和文)ロシア語母語話者の日本語音声習得に関する縦断研究

研究課題名(英文)Longitudinal Study in Japanese Pronunciation of Russian Native Speakers

研究代表者

小熊 利江(Oguma, Rie)

開智国際大学・国際教養学部・客員教授

研究者番号：00448838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ロシア人日本語学習者による発話を縦断的に収集し、発音の不自然さの観点から日本語の音声習得過程を分析した。その結果、ロシア人の日本語の発話では一定の母音が曖昧化する現象が多く起こり、それらが異なる音韻に知覚されやすいことが明らかになった。縦断研究によって、ロシア人の日本語の音声習得過程においても発音が体系的に変異する様子が表れ、音韻の漸次拡散モデルと音韻の範疇化プロセス仮説を支持する可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本に関心を持つ外国人の日本語学習を支援するために、日本語教育学は重要な研究分野である。本研究では、ロシア人による日本語の音声習得過程について縦断的に分析して、その特徴を明らかにした。また、音声習得における日本留学の影響や、ロシアの日本語教師の持つ音声教育への意識についても分析した。研究の成果は、第二言語習得理論の構築だけでなく日本語の音声教育および発音教材の開発にも役立つと考えられる。

研究成果の概要(英文)：A longitudinal study was conducted to investigate the acquisition process of pronunciation by Russian learners of Japanese. Through the analysis of their speech data, a phenomenon was revealed that specific vowels showed variations in their Japanese utterances. By analyzing longitudinally, systematic changes in variations were observed in their acquisition process, which provides empirical support for the gradual diffusion model and the hypothesis of categorization process of phonemes.

研究分野：第二言語としての日本語習得研究

キーワード：第二言語習得 日本語教育 ロシア語母語話者 縦断研究 音声習得過程 体系的変異 自然発話スタイル 発音指導

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現代のグローバル化社会では、外国語によるコミュニケーション能力が重要性を増しており、第二言語習得研究は注目されている分野である。特に、会話などの音声コミュニケーション能力に対する学習者のニーズは、近年ますます高まっている。学習者が不自然な発音のために意思が伝わらず誤解されたり低く評価されたりするなど不利益を被っているとの報告もある。しかしながら、授業では発音や話し方の指導があまり行われておらず、発音指導用の教材も限られている状況である。文法や語彙、読解など書面で行える研究に比べ、音声面の研究が大きく後れていることが原因の一つであると考えられる。

日本語教育の分野においても音声研究は後れており、様々な母語話者を対象としたデータが少ないため日本語音声習得に関する理論構築が困難な状態である。日本語教育に長い歴史を持つロシアにおいても、日本語の音声研究はほとんど行われていない。ロシアの日本語教育現場では伝統的な文法訳読等の授業が多く、コミュニケーション能力など実践的スキルを養成する授業は少ない（藪崎 2007、マシナ 2009）。ストリジャック・大田（2016）は、学習者は会話やコミュニケーション能力を求めているが、教師との間に意識の差異があると指摘している。仲矢・稲垣（2005）の調査において、ロシアと CIS 諸国の日本語教師の不得意分野として最も多く挙げられたのは、音声関連の指導であった。ロシア語母語話者（以下、「ロシア人」とする）による日本語の音声習得に関する研究は限られており、第二言語習得理論の構築や発音指導教材の開発にも寄与できるような研究を行う必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の4点である。

- (1) 横断研究から予測されたロシア人の日本語音声習得上の特徴や困難点について、縦断研究を用いて検証すること。
- (2) 縦断研究を用いてロシア人日本語学習者1人1人による実際の習得過程を詳細に記述すること。
- (3) ロシア人学習者による日本語音声習得の特徴について、言語個別性および言語普遍性の観点から明らかにすること。
- (4) 本研究の結果が第二言語習得研究の仮説やモデルに適合するかどうかを検証すること。

3. 研究の方法

第二言語習得研究は、同一学習者について長期にわたり習得過程を観察する縦断的な手法（質的研究）と、同じような言語背景の学習者を一つのグループにして分析する横断的な手法（量的研究）によって行われることが多い。同一学習者を長期に調査対象とするのは困難であるが、習得過程の実態の解明には縦断的な研究が不可欠である。そのため本研究では横断的に分析を行った上で、その結果について縦断研究を用いて検証するという手法を採った。

筆者は2013年にモスクワにてロシア人学習者51人を対象に日本語の発話データを収集した。51人の被験者のうち可能な人を対象にして、2015年、2016年、2017年、2018年にも発話データの収集を行っている。本研究では、同被験者に対して、さらに長期に音声データの収集を行うことにした。そのため2019年度以後も毎年モスクワに出張し、現地の研究協力者と連携しながらロシア人学習者の日本語発話データを収集する計画を立てた。データの収集方法は迫田（2014）の手順を参考にして、ストーリーテリング2件、ロールプレイ2件、インタビュー1件の発話の他、日本語能力測定テスト2件と被験者の学習背景の情報等を収集する。全てのデータ収集は1人ずつ対面で行うため、被験者1人あたり約2-4時間かかる。

しかし、研究開始から約1年後、2020年と2021年は新型コロナウイルス感染状況悪化のため、ロシアにて被験者の発話データを収集することが困難になった。さらに2022年以降、ロシアの戦争のため現地での調査渡航が不可能になった。

新たな発話データの収集が困難ななか、本研究では既に収集したロシア人学習者の音声データをもとに研究を遂行した。分析の対象として、内容のある発話であり自発的な独話であるストーリーテリングを用いた。聴覚評定を行うため、各学習者の発話を編集し、聴覚評定用の音声ファイルを作成した。自然発話の音声評定の方法は、小熊（2008）を参考にした。聴覚評定を行うことは一般の日本語母語話者には難しいため、音声学の専門家に依頼した。

分析の手順として、まず聴覚評定の結果を集計し、学習者1人1人の習得過程を詳細に記述する。その上で、実際の学習者のたどる習得過程を様々な観点から縦断的に検討することによって、横断研究から予測された習得順序や特徴を検証し、ロシア人学習者による音声習得上の困難点や習得過程を明らかにする。

4. 研究成果

本研究では、ロシア人による日本語音声習得上の特徴や困難点について、横断研究と縦断研究を組み合わせることによって多角的に検討した。日本語の発音を自然さという観点から分析した結果、ロシア人の日本語発話の音声的特徴と音声習得過程に関して、いくつかのことが明らかになった。研究の成果について、以下にまとめる。

(1) ロシア人日本語学習者の発話データの希少さ

まず、本研究において収集されたデータの性質について述べる。第二言語習得研究では、同一被験者について長期に観察を続けることは難しいが、同一被験者を縦断的に観察することによってのみ、実際の学習者がたどる習得過程の記述と分析が可能になる。また、音声データを分析に耐えうる質で収集することにも労力と時間がかかるため、第二言語習得研究において音声習得の縦断研究はほとんど行われていない。したがって、第二言語習得研究の縦断的手法において、約8年半の長期間にわたる同一学習者の日本語の発話データは大変希少なものである。また、データ収集の困難なロシア国内の日本語学習者を対象にした本データ自体が貴重で、学術的な価値が高いと言える。

(2) ロシア人による日本語母音の発音の変化と曖昧さ

先行研究(小熊 2018)において、ロシア人による自発的な日本語発話に生起する発音の不自然さは7種類に分類された。そのうち不自然さの多かった単音レベルの発音に着目して分析を行った結果、母音の変化と曖昧化による不自然さの現象が多くを占めることが明らかになった(小熊 2021)。なかでも母音の「う」と「お」の発音が互いに曖昧になっている様子が見られ、特に「う」の音が「お」に聞こえる不自然さが最も多い結果であった。

この音韻対の発音はロシア人にとって習得が難しいことが推察されるが、このように2つの音韻が互いに曖昧になる現象の生じる原因として、学習者による音韻の範疇設定が適切でないことが考えられる。日本語の母音の範疇設定が適切でないにもかかわらず、ロシア人には母音が新たに学習すべき音韻であるという意識が低いのではないかと考えられる。ただ、日本語能力レベル別の分析によって、レベルが上がるにつれて学習者の母音の不自然さが減少する様子が見られ、日本語能力の向上とともに音韻の範疇が修正されて習得が進む可能性が示唆された(小熊 2022a, 2024a)。これは、Tarone (1978)の提唱する発音習得上の近似化プロセスおよび小熊(2008)の音韻の範疇化プロセスのモデルを支持する結果である。

(3) 縦断研究による母音の習得過程の記述

ロシア人の日本語の発音の不自然さに関する横断研究(小熊 2022a)によって明らかになった、母音の発音の不自然さに焦点をあてて分析を行った。ロシア人にとって習得困難な母音の2つの音韻対「う」と「お」および「あ」と「お」について、縦断研究によって学習者1人1人の発音の変化を観察した(小熊 2023)。同一学習者の母音の発音状況の推移を1人ずつ縦断的に観察し詳細に記述した結果、横断研究からの予測とは異なり、上級レベルになっても母音の発音の習得が進まず不自然さが残ることが確認された。この結果は、学習者の習得過程は横断研究からの予測だけでは確実とは言えず、縦断研究によって実際に確認しなければならないことを改めて示している。

(4) 日本留学(JSL)環境における日本語学習

先行研究(小熊 2018)によると、横断研究の結果では、日本語能力が上級前半レベル以上のロシア人学習者は発音の評価が全体に高かった。これらの学習者は、中級後半レベル以下の学習者とは発音の習得段階が異なる可能性があり、縦断研究を用いて詳しく分析した(小熊 2022b)。その結果、モスクワという外国語学習環境(JFL)での日本語学習の継続によって上級前半レベル以上に達した学習者は、発音の評価が総じて高いことが明らかになった。一方、日本への留学という第二言語学習環境(JSL)を経験した後に上級前半レベル以上に達した学習者は、発音の評価があまり高くなく、逆に評価が下がっている学習者も見受けられた。日本に留学して学習することによって全般的な日本語能力は高まるが、発音分野の能力は他の分野の習得速度と同様に向上するわけではない可能性が示唆された。

(5) ロシアの日本語教師が持つ音声指導への意識

ロシアとCIS諸国で日本語を教える教師に対してアンケートを行い、学習者への音声指導に対する意識について調査した(小熊 2024b)。教師を日本語母語話者と日本語非母語話者に分けて回答を分析した結果、両者に異なる特徴が見られた。日本語母語話者教師は、現地の大学で実際に発音指導を担当しているが、多くの教師は発音指導を難しいと感じていることがわかった。一方、非母語話者教師は、学生の口頭能力の習得を重視しており、発音指導が必要だと考えていることが明らかになった。日本語の発音指導の方法を学ぶ機会の少なかった非母語話者教師は、日本語の音声習得に関するセミナーにおいて知識を得て新しい指導法を学んだ後には、自らも発音指導を実践してみたいという意欲が表れた。

<引用文献>

- ① 小熊利江 (2008) 『発話リズムと日本語教育』 風間書房.
- ② 小熊利江 (2018) 「日本語の発音の習得と指導の可能性—モスクワの大学で日本語を学習する場合—」 *Японский язык в вузе: актуальные проблемы преподавания 18* (『高等教育における日本語—教育の実際的な諸問題— 18』) ロシア CIS 日本語教師会編, pp115-128. モスクワ: Ключ-С.
- ③ 小熊利江 (2021) 「ロシア人による日本語発音の不自然さの傾向—単音レベルの発音に着目して—」 日本語教育連絡会議論文集 vol.33, 日本語教育連絡会議, 119-126.
- ④ 小熊利江 (2022a) 「ロシア語話者による日本語発音の不自然さの分類—母音の曖昧化に関する習得過程—」 『Practicing Japan』 ポズナン・クラクフ日本学専攻設立 35 周年記念国際研究学会, 口頭発表.
- ⑤ 小熊利江 (2022b) 「海外の学習者の日本語能力レベルの変化と発音の習得過程—モスクワの大学で日本語を学習するロシア人の場合—」 ブカレスト大学日本語教育シンポジウム論集, 136-145.
- ⑥ 小熊利江 (2023) 「ロシア人の日本語の母音産出に関する探索的研究—モスクワにおける縦断的観察からの質的分析—」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.35, 日本語教育連絡会議, 47-56.
- ⑦ 小熊利江 (2024a) 「ロシア語母語話者による日本語の母音の曖昧化とその習得過程」 『Practicing Japan』 ポズナン&クラクフ日本学専攻科設立 35 周年記念学会, ポズナン・アダム・ミツキェヴィチ大学&クラクフ・ヤゲロン大学編, Poznań: Wydawnictwo Rys, 123-133.
- ⑧ 小熊利江 (2024b) 「ロシアと CIS 諸国の日本語教師の持つ音声指導への意識」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.36, 日本語教育連絡会議, 66-73.
- ⑨ 迫田久美子 (2014) 『2012 年度科学研究費研究報告書』 科学研究費助成事業「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」 (基盤研究 A, 課題番号 24251010, 研究代表者: 迫田久美子).
- ⑩ ストリジャック, ウリヤナ・大田美紀 (2016) 「ロシアにおける日本語教育パラダイムシフトへの挑戦—モスクワ高等教育機関を例に—」 『第 20 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』 ヨーロッパ日本語教師会, 214-219.
- ⑪ 仲矢信介・稲垣滋子 (2005) 「ロシア・NIS 諸国への日本語教育支援再考」 『日本語教育』 127, 日本語教育学会, 51-60.
- ⑫ マシニナ, アナスタシア (2009) 「ロシアの高等教育機関における日本語教育—極東国立人文大学における日本語教育の実情と問題点—」 『外国語教育研究センター紀要 外国語教育フォーラム』 3, 金沢大学外国語教育センター, 64-74.
- ⑬ 藪崎義雄 (2006) 「ロシアにおける日本語教育の現状と問題点」 『創価大学大学院紀要』 28, 創価大学, 149-172.
- ⑭ Tarone, E. E. (1978) The phonology of interlanguage. *Understanding Second and Foreign Language Learning*, Richards, J. C. (ed.), Rowley, MA: Newbury House.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 小熊利江	4. 巻 -
2. 論文標題 海外の学習者の日本語能力レベルの変化と発音の習得過程 モスクワの大学で日本語を学習するロシア人の場合 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ブカレスト大学日本語教育シンポジウム論集	6. 最初と最後の頁 136-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小熊利江	4. 巻 35
2. 論文標題 ロシア人の日本語の母音産出に関する探索的研究 モスクワにおける縦断的観察からの質的分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小熊利江	4. 巻 33
2. 論文標題 ロシア人による日本語発音の不自然さの傾向 単音レベルの発音に着目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議	6. 最初と最後の頁 119-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小熊利江	4. 巻 20
2. 論文標題 ロシア人大学生による日本語の音声習得状況 日本語レベルと発音の不自然さ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BATJ Journal	6. 最初と最後の頁 72-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小熊利江	4. 巻 36
2. 論文標題 ロシアとCIS諸国の日本語教師の持つ音声指導への意識	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Rie Oguma
2. 発表標題 ロシア人による日本語の母音の発音の習得過程に関する探索的研究
3. 学会等名 日本語教育連絡会議 (国際学会)
4. 発表年 2022年 ~ 2023年

1. 発表者名 小熊利江
2. 発表標題 日本語能力レベルの変化と発音の習得過程 モスクワの大学で日本語を学習するロシア人の場合
3. 学会等名 ブカレスト大学日本語教育シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2021年 ~ 2022年

1. 発表者名 小熊利江
2. 発表標題 ロシア話者による日本語発音の不自然さの分類 母音の曖昧化に関する習得過程
3. 学会等名 ポズナン & クラクフ日本学専攻科設立35周年記念学会 (国際学会)
4. 発表年 2021年 ~ 2022年

1. 発表者名 小熊利江
2. 発表標題 ロシア語母語話者による日本語発音の不自然さの傾向
3. 学会等名 日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 小熊利江
2. 発表標題 ロシアとCIS諸国における日本語音声教育の意識調査
3. 学会等名 日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2023年～2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ボズナン・アダム・ミツケヴィチ大学&クラクフ・ヤゲロン大学編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Wydawnictwo Rys	5. 総ページ数 376
3. 書名 Practicing Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------